KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

# 第二言語習得における洋楽使用の意義及び授業実践報告：洋楽でTOEICスコアアップを目指す授業実践


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部<br>公開日: 2022-09-29<br>キーワード (Ja): 第二言語習得, 洋楽, TOEICスコア,<br>動機づけ, 情意フィルター<br>キーワード (En):<br>作成者: 柊元, 弘文<br>メールアドレス:<br>所属: 関西外国語大学短期大学部 |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.18956/00008045 |

関西外国語大学 研究論集 第116号（2022年９月）
Journal of Inquiry and Research, No.116（September 2022）

# 第二言語習得における洋楽使用の意義及び授業実践報告

## ― 洋楽でTOEICスコアアップを目指す授業実践 ―

柊　元　弘　文

**要　旨**

本稿では、まず、洋楽を用いた英語授業の歴史及び第二言語習得における洋楽使用の意義・位置づけについて考察し、授業実践報告を先行研究として取り上げ、洋楽が英語学習者の動機づけ・その維持・向上・情意フィルターを下げる上で極めて重要な役割を果たすことを明らかにする。次に、筆者が2020年度・2021年度の秋学期に本学短期大学部において実践した、洋楽を用いてTOEICスコアアップを目指す授業の狙い・具体的内容を詳述し、その意義や効果を授業の最後に実施したアンケート結果から分析する。その中で、TOEICスコアアップという明確な目標と結び付けることが、第二言語習得理論の枠組み、とりわけ目標設定論に照らし意義があること、洋楽の使用が英語学習者の動機づけ・その維持・向上に大きく貢献するという先行研究の結果と一致することを検証する。最後に、本授業実践の課題・今後の方向性について触れる。

**キーワード**：第二言語習得、洋楽、TOEICスコア、動機づけ、情意フィルター

## １．はじめに

本学短期大学部生の多くは、編入学または就職を目指し、TOEIC スコアの向上に懸命に取り組んでいる。1 年次に「Integrated English」「College English Grammar」「Practical English」といった英語必修科目を週に 7 コマ履修している。そのシラバスにおいても、TOEIC スコアの目標点が掲げられている。また、本学短期大学部の履修規定においても、入学から卒業までの間に、TOEIC スコア200点以上の伸長を目標の一つに掲げている。ところが、TOEIC スコア向上の重要性は十分に認識しているものの、TOEIC スコア向上を目指す学修意欲がわかず、または維持できずに、自分の目標スコアを達成できない短期大学部生も多いのが現状である。そこで、筆者は、2 年次生を対象に秋学期に担当する「K.G.C. ベーシックス D・アカデミックワークショップ」において、主に学修に対する動機づけ・その維持・向上と TOEIC スコア向上を狙いとして、2020年度及び2021年度の秋学期において「洋楽を用いて TOEIC スコアアップを！」という授業を実践した。本稿では、まず、英語の歌（以下原則「洋楽」・引用の場合は原文のまま）を用いた英語授業の歴史に触れ、第二言語習得における洋楽

使用の意義・位置づけについて考察し、その授業実践・成果検証の先行研究を取り上げる。次に、筆者が2020年度・2021年度の秋学期に担当した「K.G.C. ベーシックス D・アカデミックワークショップ」において実践した洋楽を用いて TOEIC スコア向上を目指す授業の狙い・具体的内容を述べ、その効果を授業の最後に実施したアンケート結果から検証する。最後に、本授業実践の課題を考察し、今後の方向性について述べる。

## 2．英語教育における洋楽の使用の歴史

### 2．1　師範学校における洋楽の使用（1920年代～1930年代）

江利川（2006）が示す資料「長崎県師範学校一覧」（1920年）の「学校例規」の中の「長崎県師範学校英語科教授法要義　1920（大正９）年10月」において、「蓄音機を備へ、外人吹込みの読方会話演説唱歌のレコードを購入すること。」（江利川2006、p.123）という記述が見られる。この記述から、少なくとも1920年ごろには、英語教育において洋楽が使用されていたものと推測される。また、滝口（2020）は、戦前から洋楽が英語の授業に取り入れていたと述べており、女学校や師範学校がその中心であったことが特徴の一つであると指摘している。それを表す戦前の文書の一つとして、水田（1935）の以下の記述を紹介している。

師範生は、幸いなことには、中学生などと異なって自分で楽譜が読めたりオルガン、ピアノが弾けたりするのだからこの方面などをよく利用して英語の歌の適当なものをたくさん教えてやることもまた英語への興味を増すと共に、英語授業の能率を高める一良策であろう。（水田清恵1935、p.493）（滝口2020、p.31）

### 2．2　1940年代～1950年代

「昭和26（1951）中学校・高等学校学習指導要領 外国語科英語編Ⅰ（試案）改訂版」において、「第２章英語教育課程の構成」、「Ⅱ．教育課程構成における単元法」、「５．単元制」、「Ｂ．単元例―中学校第３学年または高等学校第１学年」のなかの、「Ⅱ．目標」、「２．言語機能上の目標」で、「s. 歌を歌う能力を養う。」がその一つとして挙げられている。さらに、「Ⅲ．学習活動と経験との例」の中においては、より具体的に「９．唱歌委員は、会合のとき学級全体で歌う歌をいくつか選ぶ。歌詞は掲示板に掲示する。全員がこれを写して暗記する。」と記載されている。

「文部省中学校・高等学校学習指導要領外国語科英語編（昭和31年改訂版）」の高等学校に関する部分において、「第３章　外国語科第一外国語」、「２　第一外国語（英語）（１）中学校から継続して履修させる15単位の場合、ａ　聞き方と話し方の分野」のなかの話し方の分野において、「やさしい詩や歌の暗しょう（recitation）（中略）などを指導する。」という記述がなさ

れている。

平川（2021）によると1946年２月に放送開始されたNHKラジオ「英語会話」（通称カムカム英語）のテーマソングにも英語の歌が用いられたという。このテーマソングは、「証城寺の狸囃子」のメロディーに英語の歌詞をつけたもので、２回目の２月２日の放送で講師の平川唯一が視聴者に紹介したという。その紹介の中で、「しっかりと一人で歌えるように英語の歌を習いましょう。この歌を歌っているうちに、知らず知らず英語の発音ができるようになり、だんだんと英語の基本が誰にでもわかってくるのですから。」（平川2021、p.168）と平川講師が説明し、英語習得における英語の歌の効用に触れている。平川（2021）は、このテーマソングが全国に広がり、番組の視聴者を増やす一つのきっかけになったこと等を詳述している。

### ２．３　1960年代～1980年代

滝口（2020）によると、戦後の1970年代半ばまでは、歌の「導入期」で、歌の効用を解く授業実践報告は散見されたものの、『あくまでも「レクレーション的」であり、早期英語教育の分野を除くと英語の歌が授業のメインに座ることはなかったようである。』（滝口2020、p.31）としている。急激な進展を見せたのは、1980年代に入ってからで、そのきっかけとなったのは、英語の授業の中心に英語の歌を据えて、一貫した授業を行った大阪の中学校教員上村敦が、英語の歌を授業に主教材として取り入れることを提起したことであるという。滝口（2020）は、その時期を「発展期」（滝口、2020、p.32）と称し、多くの授業実践報告がなされ、さらには、英語教育誌「英語教育」（三友社出版）が特集を組んで紹介した事をその証左として提示している。授業実践報告の例として、「英語の歌と学習意欲」（米蒸1980）、「歌の授業」（山門1980）を上げている。また、「新英語教育」の特集の例としては、1980年第二特集「英語の歌と授業」、1984年10月号（No.181）での特集「授業に生かす英語の歌」、1989年３月号（No.234）における特集「心ひらく英語の歌」、1993年２月号（No.282）における特集「カラオケ時代に英語の歌を」、1998年２月号（No.342）における特集「歌は授業のエッセンス」等を挙げている。（滝口2020、p.32）

### ２．４　1990年代～現在まで

滝口（2020）も述べているように、1990年代半ば以降のパソコンやインターネットの急速な普及に伴って、洋楽が、YouTube等からもアクセス可能となり、従来のカセットテープ・CDの時代とは比較にならないほど、英語の授業にも取り入れやすい環境が整ってきた。英語教育雑誌にも洋楽を取り入れた授業実践報告が紹介されるようになってきている。例えば、滝口（2020）も紹介している「新英語教育」は、1994年から「授業に歌を」のコーナーを設置し、2021年10月号で第227回となっている。そこでは、２ページにわたり、全国の小・中・高・

大学の教員による、歌を用いた授業実践報告が掲載されている。2022年１月号（No.629、p24-25）においても「授業をおいしくするスマイル・レシピ160、英語の歌で授業を始めよう Hassy も歩けば English Songs に当たる」（橋山芳子　滋賀・公立高校）が取り上げられるなど、洋楽を中心に歌を授業に取り入れた報告が多く掲載されている。これは、報告のタイトルから明らかに洋楽を使用した授業実践報告とわかるものであるが、それ以外にも洋楽を活用した授業実践報告がなされている。例えば、2022年１月号（No.629）特集「教材をつくるチカラ～私が生徒に伝えたいこと～」において「『英語って楽しい』そう言ってもらえる授業を」（植野由希恵　埼玉・白樺学園大学・短期大学）（p.18-19）においては、YouTube を活用して毎時間洋楽を取り上げた授業内容を紹介している。

## ３．洋楽を英語の授業に用いる意義

洋楽を英語の授業において用いることの意義を、動機づけ及び情意フィルター仮説の２つの第二言語習得理論の観点から論じてみたい。

### ３．１　動機づけの観点

第二言語習得理論において、第二言語習得成功の大きなカギとなる要因の一つが動機づけであると多くの論者が主張している。鈴木（2017）は、Masgoret & Gardner（2003）のメタ分析（meta-analysis）を引用しながら、第二言語習得に及ぼす様々な要因の中で、「動機づけが学修到達レベルに一番影響があることがわかった。」（鈴木2017、p.162）と述べている。Dörnyei（2005）は、個人差要因の中で、動機づけは非常に重要であり、「十分な動機づけがなければ、たとえずば抜けた能力がある学習者であっても長期的な目標を達成することはできない。」（p.65）と主張する。白井（2012）は、Dörnyei のタスクモチベーションの考えに言及し、動機づけというのは、時間の経過とともに変化してゆくものであり、重要なことは、学習者の動機づけを高めると同時に、その高まった動機づけが、行動につながるようにすることが重要であると主張する。そして、「学習活動が楽しくないと動機づけは下がる。」（白井2012、p.25）と述べる。小林（2003）は、洋楽を授業で活用することで、授業が活性化し、英語学習への動機づけにも役立つとして、以下のように述べている。

洋楽観賞は、教師の指示や強制なしで行われる自発的なインプットであり、内発的な動機づけによる行為である。この習慣を教室外のインプット供給源として活用しない手はない。洋楽を授業に取り入れ、その楽しさを体験させ、英語を身近な存在であるということを再認識させてあげることで、英語学習の意欲が高まることが期待される。（小林2003、p.82）

角山（2001）は、洋楽を教材として活用することの利点の一つとして、多くの先行研究

で、学習者の動機づけ、学習態度に大きな効果があったことが指摘されているとする。先行研究（Laskowski 1995）を例に出し、音楽が学生にとって親しみやすいものであり、その歌の意味が正確に理解できることが、動機づけに大きな効果があったとし、「外国語学習における動機づけの重要性を考えると、これは極めて大きな利点と言える。」（角山2001、p.11）と述べている。岩下（2016）は、自身の授業実践報告の中で、「学生のモチベーション向上と英語力の伸長に洋画と洋楽のリスニングやリーディング活動が着実に貢献しているという手応えを感じる場面があった。」（岩下2016、p.48）と述べている。森貞（2014）は、洋楽を用いた授業実践内容を紹介し、その授業を受講した学生のアンケート調査の結果を分析している。その中で、「洋楽の使用が、学生に英語の学習が楽しいものであることを実感させ、学習意欲を増進させる効果を持っていること・・・中略・・・　を確認した。」（森貞2014、p.15）と述べている。Dörnyei（2001/2012）は、自己決定理論（Self-determination theory）Deci&Ryan（1985, 2002）を引き合いに出し、様々なタイプの内発的動機と外発的動機に焦点を当てた理論として紹介し、動機づけ理論の中で最も影響力のある理論であるとする。Dörnyei（2001/2012）によると「内発的動機は、ある活動をする喜びや学習者の好奇心を満足させるような喜びや満足を経験しようとする動機であり、外発的動機は外的な報償（いい成績など）を得たり、罰を避けたりしようとする動機である。人間の動機は、自己決定された（内発的な）動機と支配された（外発的な）動機の連続体である」（Dörnyei 2001/2012, p11）とする。さらに、Dörnyei（2005）は、Brown（1990, 1994）は、第二言語を学習する教室では、内発的動機が重要であると主張する論者であると紹介している。

Dörnyei（2001/2012, p.29）は、動機づけの具体的な方略を 4 つの局面に分けて説明する。

① 基本的な動機づけの条件を整えること（Creating the basic motivational conditions）
② 初期の動機づけを行うこと（Generating initial motivation）
③ 動機づけの維持をすること（Maintaining and protecting motivation）
④ 前向きに振り返って自己評価を行うように促すこと
（Encouraging positive retrospective self-evaluation）

この 4 つの局面のうち、3 番目の動機づけの維持をすることの中で、「学びを刺激的で楽しめるようにすること（Making learning stimulating and enjoyable）」Dörnyei（2001/2012, p.29）がその具体的な方略の一つとして挙げられている。まさにこの点が、洋楽を授業に取り入れる大きな理由の一つでもあり、大きな利点の一つでもあると考えられる。白井（2012, p.25）における「学習活動が楽しくないと動機づけは下がる。」という主張とも軌を一にする。小林（2002）も Graham（1992）に言及しながら述べているように、「洋楽の数ある効用の中で、もっとも顕著なのは、洋楽に学習者を楽しませる要素があるという点である。」（小林2002、p.85）

上述の先行研究の中でも、例えば、森貞（2014）におけるアンケート調査の中でも、「歌を

用いた学習は楽しいですか」という問いに対して、147名中95％に当たる140名の学生が「はい」と回答していることからも、学生が洋楽を用いた授業を楽しんでいることが明らかである。特に洋楽が好きである、洋楽に興味があるという学生にとっては、洋楽を用いた授業は非常に楽しくかつ効果的なものとなることが推測される。というのは、佐藤（2015）も述べるように、「好きこそものの上手なれ。教材は自分にとって興味のあるものが一番」佐藤（2015、p.146）であるからである。ここでは、洋楽を用いた授業の実践報告を中心とした先行研究の結果と第二言語習得理論における代表的な動機づけ理論を関連付けることによって、洋楽を授業で用いることの意義・位置づけ・有益性を明確にした。

### ３．２．情意フィルターの観点

Lightbown & Spada（2006/2011）により論じられているStephen Krashen（1982）のMonitor Modelにおいて、展開された５つの仮説のうちの一つである情意フィルター仮説（Affective Filter Hypothesis）の観点から、洋楽を授業に取り入れることの意義について論じてみたい。Lightbown & Spada（2006/2011）によると、「仮に大量の意味の分かったインプットをしても、うまく言語を習得できない原因の一つが、情意フィルター仮説で説明できる」（Lightbown & Spada 2006/2011、P.37）とする。Lightbown & Spada（2006/2011）によると、情意フィルターというのは、言語習得の心理的な妨げのことで、情意とは、気持ち、動機、必要性、態度、感情的な状態を指す。例えば、学習者が緊張したり、不安に感じたり、面白くないと感じたりしたら、そのインプットを寄せ付けず、言語習得にとって無益なものにしてしまうという。従って、「言語習得のためには、情意フィルターを下げて、インプットが頭に入りやすい状態にすることが大切」（上智大学CLTプロジェクト2014. P.94）である。

Roslim et al（2011）は、文法を教えるために歌を用いることの理論的な側面の一つとして、Stephen Krashen（1982）の情意フィルター仮説に言及し、EFLの教室で英語の歌を使うことで、和やかな雰囲気を醸成することによって学びやすい環境を作り、学生の不安を減じ、学ぶ興味を高めて目標言語を学ぶように動機づけを行うことが可能となると主張する。Schoepp（2001）は、歌を学習ツールとして使用することの理論的な合理性を３つ（Affective Reasons, Cognitive Reasons, Linguistic Reasons）（Schoepp 2001, p.1）挙げている。その内、Affective reasonsの説明においては、Krashen（1982）の情意フィルター仮説に言及し、歌が情意フィルターを下げて言語習得を促進する一つの方法であると述べている。今村（2020）も、Schoepp（2001）の上記主張に言及したうえで、「つまり、英語の歌が情意フィルター（the affective filter）を下げ、学習者に英語学習を促進する一つの方法となることができるのである。」（今村2020、p.190）と述べている。さらに、自身の授業実践の結果としても、「学生自身が扱いやすい、また好きな歌を用いることで、情意フィルター（the affective filter）をさげ、英語学習に関心

を持って取り組むことができる可能性を見出すことができた」（今村2020、p.201）としている。牧野（2012）は、英語に苦手意識を持つ大学生を対象にした授業実践の効果を分析し、歌を導入する前は、「リスニングに対して心理的な壁を作り、聞く前からあきらめる、あるいは全く聞こうとしないという態度が往々にして見られた」（牧野2012、p.80）が、「英語の歌は英語を聞き取ろうとする意欲を向上させるだけでなく、クラスの雰囲気を明るくし、学生の英語学習への緊張を取り去るという点で、優れた教材と言える。」（牧野2012、P88）と結論付けている。ここでは、情意フィルター仮説には言及していないものの、実質的には、学生の情意フィルターを下げて、動機付けを向上させたということと同義であると思われる。Saricoban & Metin（2000）は、歌を授業で用いることで、決まりきったアクティビティに変化をもたらすと述べる。さらには、Loand Fai Li（1998:8）に言及し、通常授業では英語を話す時に緊張している学生たちに、和やかな雰囲気を提供すると述べている。本研究においても、情意フィルター仮説には言及していないものの、内容的には同じことを述べていると判断できる。村野井（2006/2017）は、「第二言語でのコミュニケーションに対して学習者が感じる不安（Anxiety）も、第二言語習得の成功の度合いを大きく左右する心理的要因である」（村野2006/2007、p121）としたうえで、Oxford（1990）を引き合いに出し、彼がその不安を減ずるストラテジーとして、プログレッシブ・リラクゼーション、深呼吸、瞑想、音楽の活用、笑いの活用が効果的であると指摘していることを紹介している。そして、「ウオーミングアップでの音楽の使用、BGM としての音楽の使用、笑いを誘う活動の導入など、教師が考慮すべき点であると考えられる」（村野井2006/2007、p124）と述べている。

以上、先行研究を通じて、洋楽を英語の授業に取り入れる意義を主に情意フィルター仮説の観点から眺めてきた。学生が、洋楽という身近な手段を利用することによって、英語学習に対する不安を取り除き、よりスムーズに英語学習・授業に取り組めるという分析が多いことがわかった。

## 4．洋楽を利用した授業実践に関わる先行研究

### 4．1　授業実践研究報告事例1（小樽商科大学）

小林（2003）において、「洋楽を使用した活動は、単に授業を活性化し、英語学習の動機づけに役立つだけでなく、音声認識能力と発音を高める本格的な教授法として認知されるべきである」（小林2003、p.81）との考えに立ち、1990年以来の長期にわたり洋楽を利用した授業実践の具体的な狙いや授業内容を論じている。実際に小樽商科大学のホームページのシラバスにも、授業の達成目標の一つとして「洋楽の歌詞がある程度聞き取れ、正しい発音で歌えるようになる」と記載してある。小林（2003）によると、洋楽を授業において使用する具体的な理由

として、洋楽がもっとも英語学習者に馴染み深い身近な英語媒体であること、洋楽が学習者を楽しませる要素があり授業のレディネスと授業の雰囲気の活性化に役立つこと等のほか、洋楽が最も難易度の高い教材であること、発音の強化、会話フレーズの内在化に役立つこと、動機づけに役立つこと等を挙げている。

実際の授業内容は以下の通りであると紹介している。まず、歌詞の大まかな内容把握を、質疑応答、内容真偽、文完成など形で行う。次に、独自のリスニングシート（空欄穴埋め、語彙選択、相違箇所の指摘、並べ替え）を使用して、音声認識のタスクを行う。その後、歌詞の和訳、重要表現や文法、音声変化についての解説を行う。最後に、全員でその歌を合唱する。その際、「教師も一緒に合唱しなければならない。」（小林2003、p.103）点を強調している。

### ４．２　授業実践研究報告事例2（私立大学非英語専攻学生）

今村（2020）は、洋楽をはじめとする英語の歌は、学習者の情意フィルター（the affective filter）を下げ、学習動機を高める authentic materials であり、英語の音声変化の理解に有効であるとの考えに立ち、洋楽を用いた英語の授業が学生の英語学習の動機づけとなり得るのか、英語の音声変化を正しく理解できるのかを検証している。

私立大学に通う非英語専攻学生２年生と対象にしたリスニング・スピーキングに重点を置いた通年（年30回）の英語必修科目において、「English with Pop Hits　ヒットソングで学ぶ総合英語」（角山・Caooer、2014）を教科書として用いて実施している。授業内容は、楽曲を聴いての空所補充、歌詞の内容理解、音声変化の理解と発音、ペア・グループで歌についての英語での意見交換というものである。さらに、授業の最後の２回で、個人発表という形で、学生が選んだ英語の歌１曲について、英語と日本語で説明させている。発表項目は、楽曲のタイトル・歌手名・選曲理由（英語）、音声変化・文法・歌詞の魅力・個人的に注目してほしいところ（日本語）としたという。最終回の授業で、質問紙調査を実施し、その結果を分析している。その分析結果をもとに、英語の歌を英語学習にとり入れることは有意義かの質問に対して94.4％が肯定的に回答したことなどを紹介し、英語の歌は情意フィルターを下げ英語学習の動機づけとなる可能性が示唆されたと結論付けている。また、英語の歌が、「音声変化の理解を促したととらえることができるだろう」（今村2020、p.202）と述べている。

### ４．３　授業実践研究報告事例３（大学１年生）

牧野（2012）は、英語が苦手な学生、とりわけリスニングに嫌悪感を持つような学生に対して心理的な壁を取り除き学生の聞こうとする態度を醸成し、結果的にはリスニング力の向上につながるかを検証している。対象者は大学１年で英語習熟度別最下位２クラスの学生である。TOEIC 対策クラスの中で、洋楽のリスニングを週１回、20分程度実施している。牧野自身が、

コマーシャルソングや若者に人気がある新しい曲を選び、独自の聞き取りシートを学生の英語力を考慮したうえで作成している。また、アウトプット活動として、曲のさびの部分を口ずさむことや、聞き取れなかった箇所をリズムに合わせて読ませることなどを実施している。さらに、リスニング力の向上の効果検証のために、4 月に事前テスト、12月に事後テストを実施し、対応のあるｔ検定で分析している。また、学生の動機づけにどう影響したかを明らかにするために、学生にアンケート調査と一部の学生へのインタビューを行って、分析結果をまとめている。まず、リスニングテストにおいては、2 種類（洋楽聞き取りテスト及び TOEIC 問題文聞き取りテスト）の事前・事後テストの平均点の差において、実施した 2 クラスにおいてともに有意差が認められたとしている。次に、アンケート結果の分析では、苦手意識を完全に払しょくするところにまでは至っていないものの、学生の動機づけや自己効力感が高められたことが示唆されたと分析している。そのうえで、「洋楽の聞き取りは、英語が苦手な学生に英語を聞くことに興味を持たせ、英語を聞きとりたいと思わせるのに有効な手段であり、それを続けることで、リスニング力向上に一定の効果があることが確認できた」（牧野2012、p.87）と結論付けている。

以上の事例のほかにも、多くの授業実践報告が先行研究としてなされている。例えば、森（2014）は、福井工業高等専門学校において、90分授業において、25-30分で洋楽を用いた活動を週 1 回の授業で毎回、週 2 回の授業では 2 回に 1 回の割合で実施し、歌詞の聞き取り、答え合わせ及び単語・熟語・文法に関する解説など、「歌える」翻訳による教員歌唱、全員（教員＋学生）による原曲歌唱という流れになっている。岩下（2016）によると、熊本高等専門学校においては、「映画・音楽」コースという専用のコースを設置している。その具体的な授業内容は、「洋画と洋楽を用いたリスニング・リーディング、音楽活動であり、それらの力を実際の洋画や洋楽に触れることで実践的に身につけて行くことがねらい」（岩下2016、p.47）であるという。

## 5．洋楽を用いて TOEIC スコアを目指す授業実践

### 5．1　対象クラス

筆者が2020・2021年度秋学期に担当した本学短期大学部 2 年生の「K.G.C. ベーシックス D・アカデミックワークショップクラス」が対象である。週 1 回15回のクラスであるが、全校生徒を一堂に集めて実施する全体授業等もあるため、担任が個別に担当する授業は2020年度10回、2021年度11回であった。対象となった履修学生は、各年度29名、30名で、両年度合計59名である。

### 5．2　本授業の狙い

洋楽を通して、そこで使用されている単語・熟語・表現・音の連結・脱落・弱化・同化など

を身に付けるとともに、歌詞の中から TOEIC 頻出の文法事項を学ぶことによって、英語力全般を高めると同時に TOEIC 対策も行うことが、本授業の狙いである。洋楽を英語学習に取り入れることの第二言語習得理論の枠組みの中での位置づけを踏まえたうえで、洋楽と TOEIC スコアアップを結びつけることの理論的な意義・狙いについて述べる。

Dörnyei（2001/2012, p.29）は、具体的に分けた 4 つの動機づけの局面の中の初期の動機づけの中で、学習者の目標志向性を強化するという具体的な項目を挙げている。さらに、動機づけの維持をするという局面の中で、明確な学習者目標を設定すること、自分で動機づけできる方略を促進することを具体的な項目の一つとして挙げている。ここでは、Dörnyei（2001/2012）の中で展開されている理論を中心に、その中でも言及されている The Goal Setting Theory・Expectancy-value theory という 2 つの理論とも関連付けて、TOEIC スコアアップを授業の目標に掲げる意義について述べる。

Lock &Latham（2013/2017）は、この理論の核となる 2 点を次のように述べている。

（1）目標の難易度と達成度合いには明確な関係があり、Lock（1967）においても、高い目標を掲げた参加者の達成度合いは低い目標を掲げた参加者より250％以上高いことは述べられていたが、その後のメタ分析によってそのことがさらに裏付けられた。（p.5）

（2）具体的で、難易度の高い目標の方が、単に「ベストを尽くす」というようなあいまいで、抽象的な目標よりもより高い達成度合いにつながる。（p.5）

この考えと方向性を同一とするように、Dörnyei（2001/2012、p.84）も、目標は明確で具体的で、結果を測定可能で、挑戦的で難易度が高く、現実的であるべきと主張する。さらに、目標には期限を設けることも必要で、短期的目標と長期的目標の両方を設定するべきであると述べている。さらには、Brophy（1999）, Eccles & Wigfield（1995）の Expectancy-value theory に言及しながら、様々なタスクをこなす動機づけには、個々人の成功する期待度とその成功に個人が見出す価値の 2 つがカギとなる重要な要素であると述べる。第二言語習得においては、小テスト、試験、大会などを公式で客観的な目標として例示している。Kelly（2005）も、英語を専攻しない学生のように学習意欲の低い学生に対してもグローバル社会の将来の職業設計上の英語の重要性に気づかせ、TOEIC や英検などの短期的、達成可能な目標設定が意欲向上に有効であるとして、具体例の一つとして TOEIC を挙げている。

本授業において掲げる「TOEIC スコアアップ」という目標は、上述した理論的な枠組みと本学短期大学部生にとっての TOEIC の価値に照らし、英語学習の目標として TOEIC スコアアップは、次のような特性があるという点において、最適な目標と言えよう。

① 個々人のレベルに合わせて、具体的かつ明確に点数で目標設定が可能であること。

② 結果も客観的に測定可能であること。

③ 6 か月以内に700点達成するという目標を立てるなど、達成期限を設定できること。

④　本学の短期大学部生の多くの就職希望者・3年次編入希望者の両方にとって、非常に価値のある目標であること。（本学短期大学部生が希望する職種の多くが、TOEIC スコアが高い方が有利な場合が多いこと、企業によっては応募に必要な最低点を提示する企業もあること、本学3年次編入学希望者が全学生の半数以上におよび内部推薦の応募条件に必要な TOEIC スコアが設定されていることなどがその背景。）

⑤　短期・長期両方の目標設定も可能であること。

このように、本学短期大学部生にとって目標として妥当性の高い TOEIC スコアアップを洋楽を使用する授業の目標とする狙いは、これまで論じてきたように、動機づけ・情意フィルター仮説の観点から非常に有意義な洋楽を授業に取り入れ、洋楽を TOEIC スコアアップに直結させる内容の授業を展開することで、学生の TOEIC 対策学習に対する、精神的な壁を取り払いさらに高い動機づけとその維持に極めて有効であると考えたからである。つまり、動機づけ・情意フィルターの点から非常に効果的な洋楽と目標として極めて強力で妥当性の高い TOEIC スコアアップを結びつけることで、その相乗効果で学生の学習意欲を飛躍的に高めることが本授業の狙いである。短い授業期間のみで直接的な TOEIC スコアの伸長という成果に結びつけることは、難しいと思われるものの、その目標に向けての学習意欲を醸成し、本授業をきっかけにより中・長期的なスパンで TOEIC スコア向上に結び付けるのが狙いである。これまでの先行研究をみると、洋楽を取り入れた授業実践報告は多く存在するが、洋楽を直接 TOEIC スコアアップの目標に結びつけた上で、歌詞の中から TOEIC 頻出文法項目を拾い出し TOEIC 問題演習に直結させた実践報告はほとんど見られない。そこで、このギャップを埋めるべく、本授業をデザインするに至ったのである。

### 5．3　具体的な授業内容

#### 5．3．1　英語による3分間スピーチ

授業の冒頭15-20分間で、毎授業毎 3-4 名の学生が英語で3分間スピーチを行い、各自の洋楽を使用した英語勉強法について具体的に紹介する。スピーチ後にクラスメートからの質問に答える。この質疑応答もすべて英語で行う。スピーチの評価は、聞き手である学生全員と教員で行い、その平均点を評価点とする。この活動の狙いは、英語の発話機会を設けることと、お互いに洋楽を利用した英語学習方法を紹介し合うことで、学生の気づきや動機づけにつなげることである。

#### 5．3．2　歌詞のリスニング演習

これは、洋楽を聞きながら、独自に作成した歌詞の穴埋めシートの空欄を聞き取って単語を記入する、リスニング演習である。 曲は原則1回だけ聞き、聞き終えたら学生に答えさせながら、一つずつ答え合わせする。後に、「この曲から学べる Listening point!」として、その曲

でリスニング上ポイントとなる点を解説する。この演習の狙いは、歌詞の中でよく出てくる音の連結、脱落、弱化、同化などに慣れて、リスニング力の向上をはかると同時に、スピーキングにおいても必要に応じて使えるようにすることである。尚、使用する楽曲の選定に当たっては、学生になじみがあると思われる比較的新しい楽曲も取り入れるようにした。

### 5.3.3　文法項目演習

「この曲から学べる Grammar Point!」と題して、歌詞の中から、TOEIC において良く狙われる文法項目を含む英文を抜き出し、ポイントを解説する。曲によって、その項目数は異なるが、多くの場合 2 項目程度にとどめる。解説ののちに、「TOEIC ではこう出る！」というコーナーを設け、その文法項目を問う TOEIC　PART 5 の文法問題 1-2 問を解いてみる。どの文法項目を選定するかという点や TOEIC 問題の選定・作成は既存のテキスト等は利用せずに、筆者の判断で TOEIC 頻出項目を選定し、独自に TOEIC 問題を選定または作成した。この演習の狙いは、TOEIC に頻出の文法項目の理解を深めるとともに、その項目がどのような形で実際に TOEIC に出題されるのかについて習熟し、その項目を問う TOEIC 問題を解く力を高めることである。ここが、本授業の最も根幹となる重要な狙いの一つであるので、この教材は、最も時間と手間をかけて準備した。洋楽の歌詞が文法項目を教えるための教材に十分になり得るという点について、滝口（2000）も滝口（1994）を引き合いに出し、「かつて30曲を選んで高校までで学ぶ文法項目がすべてはいっていることを確認した」（滝口2000、p.35）と述べている。

### 5.3.4　語彙力増強演習

「この曲から学べる単語・熟語・表現など」と題して、その曲の歌詞の意味を理解するのにポイントとなる単語・熟語、また、TOEIC に頻出する単語・熟語などに的を絞り、解説する。単語・熟語などについて知識を得た後に、歌詞全体に目を通し、歌詞全体の大まかな意味や必要に応じてその曲がつくられた背景や経緯などについても理解を深める。この演習の狙いは、その曲の歌詞の英文を通して、語彙力を増強し、歌のメロディーや全体の意味の中で覚えることで、より学生の記憶に定着させることである。洋楽が、単語力増強にも有益である点について、滝口（1994）も、「英語の歌 1 曲で平均80語の単語と出会います。ここで選んだ30曲で出会う単語はおよそ1500語、高校 1-2 年生が新しく出会う単語の数に匹敵します。」（はしがき）と述べている。

### 5.3.5　リスニングポイント習得演習

「この曲から学べる Listening point!」と題して、歌詞の英文の中から、典型的な例文を抜き出し、音の連結、脱落、弱化、同化などについて理解を深める。この演習の狙いは、リスニン

グ演習で実際に聞き取り演習を行ったことを、理論的な側面から知識として整理し、一般的なルールとして理解し、実際の TOEIC リスニング部門や一般的なスピーキングの場面で活かせるようにすることである。

### 5．3．6　曲で取り上げた文法項目を問う TOEIC 問題演習

これは、その日の授業で取り上げた文法項目を問う TOEIC 問題を解く演習である。ここでの問題は、形式はもとより難易度の面でも TOEIC 試験本番に近いレベルである。本演習の進め方は、まず、学生が各自で問題を解く。その際に厳格に時間制限を設ける。その後、ペアになってお互いに答え合わせを行い、合わない問題については議論をするという活動を行う。さらに、クラス全体で答え合わせを行いつつ、教員が一問ずつ解答に至るプロセスや解答上の目の付け所などを解説する。本演習の狙いは、TOEIC 本番を意識し制限時間内で解答できるスピードを養うことと取り上げた文法項目の定着化・TOEIC 問題における知識のスムーズな運用力向上をはかることである。

## 6．アンケート結果分析

### 6．1　アンケートの概要

2020年度秋学期、2021年度秋学期いずれの年度も、授業の最終回で、アンケートを実施した。受講人数は、2020年度秋学期29名、2021年度秋学期30名の合計59名で、アンケート有効回答数は、それぞれ26名、30名の合計56名であった。アンケートは、授業全般についての感想・意見や自分の自慢の英語学習方法を記述する自由記述 2 問と選択肢の設問 4 問及び自分の好きな洋楽を挙げる問の 7 問から成る。その内ここでは、選択肢の設問 4 問を取り上げる。

表１　アンケート対象人数と有効回答数

| | 2020年度 | 2021年度 | 合計 |
|---|---|---|---|
| アンケート対象人数 | 29人 | 30人 | 59人 |
| 有効回答数 | 26人 | 30人 | 56人 |

### 6．2　アンケート質問別結果分析

表２　１．今まで自分の英語学習に洋楽を少しでも取り入れてきたか？

| | 2020年度 | 2021年度 | 合計 | 割合 |
|---|---|---|---|---|
| ①はい | 18人 | 25人 | 43人 | 76.8% |
| ②いいえ | 8人 | 5人 | 13人 | 23.2% |

表 2 から、76.8％の学生が、本授業受講前からすでに洋楽を自分の英語学習に取り入れてきたことがわかる。このことから、本授業の受講生は、洋楽が好きか少なくとも興味がある学生が選択している事が示唆されている。

表３　２．洋楽を英語学習に組み入れると学習意欲の向上につながると思うか？

| | 2020年度 | 2021年度 | 合計 | 割合 |
|---|---|---|---|---|
| ①非常にそう思う | 22人 | 26人 | 48人 | 85.7% |
| ②そう思う | 3人 | 3人 | 6人 | 10.7% |
| ③どちらともいえない | 1人 | 1人 | 2人 | 3.5% |
| ④あまり思わない | 0人 | 0人 | 0人 | 0.0% |
| ⑤まったく思わない | 0人 | 0人 | 0人 | 0.0% |

表３から、洋楽を英語学習に組み入れることによって、学習意欲の向上につながると答えた学生が①②を合わせると96.4％存在することがわかる。上述の3-1、3-2の中で論じた内容及び5-1、5-2、5-3で取り上げた先行研究の内容とも一致する結果となった。

表４　３．洋楽は英語力のどのスキルの向上に役立つと思うか？（複数回答可）

| | 2020年度 | 2021年度 | 合計 | 割合 |
|---|---|---|---|---|
| ①リスニング力 | 24人 | 30人 | 54人 | 96.4% |
| ②スピーキング力 | 15人 | 12人 | 27人 | 48.2% |
| ③ライティング力 | 4人 | 2人 | 6人 | 10.7% |
| ④リーディング力 | 8人 | 11人 | 19人 | 33.9% |
| ⑤語彙力・表現力 | 18人 | 23人 | 41人 | 73.2% |
| ⑥発音の向上 | 22人 | 24人 | 46人 | 82.1% |
| ⑦その他＊ | 0人 | 1人 | 1人 | 1.8% |

＊スラングや英語特有の言い回し

表４から、洋楽は、リスニング力96.4％、発音の向上82.1％、語彙力・表現力73.2％に主に役立つと感じている学生が多いことがわかる。リスニング力については、既述の先行事例のうち特に牧野（2012）におけるリスニング力の向上、岩下（2020）における音声変化の理解を促したという分析結果と軌を一にする結果となった。発音の向上、語彙力・表現力については、森貞（2015）における、「この学習意欲の増進が、リスニング力の強化、発音・語彙・表現の促進につながっていると考えられる。」（森貞2015、p.257）と同様の結果である。

表５　４．今後も何らかの形で洋楽を英語学習に役立てて行きたいか？

| | 2020年度 | 2021年度 | 合計 | 割合 |
|---|---|---|---|---|
| ①非常にそう思う | 23人 | 27人 | 50人 | 89.3% |
| ②そう思う | 2人 | 2人 | 4人 | 7.1% |
| ③どちらともいえない | 0人 | 1人 | 1人 | 1.8% |
| ④あまり思わない | 1人 | 0人 | 1人 | 1.8% |
| ⑤まったく思わない | 0人 | 0人 | 0人 | 0.0% |

表５において、①と②合計で96.4％であることから、履修学生のほとんど全員が、「今後も何らかの形で洋楽を英語学習に役立てて行きたい」と考えていることがわかる。＜表２＞において、本授業受講前からすでに洋楽を自分の英語学習に取り入れてきた学生は、43人・76.8％であったことを考えると、本授業を受講することによって、さらに11人の学生が洋楽を新たに、英語学習に取り入れてみようと考えるに至ったということを示している。

### 6.3　自由意見既述欄

「授業全般についての感想意見等自由に書いてください。」という質問の解答の中から、いくつか抽出する。

・知らない曲もあったが、聞いているうちに興味を持ちプレイリストに入れて何度も聞くようになった。聞き返すたびに熟語や英語表現を思い出しいい勉強になっている。
・洋楽を聞いて楽しみながら授業を受けることで英語力を伸ばすことができるなんてこんなうれしいことはない。
・様々なジャンルの洋楽を知り、単語や文法、様々な表現の仕方、スピーキング力・リスニング力を伸ばすことができたと思う。
・洋楽を使って勉強したことがなかったのでたくさん新しい発見があって楽しかった。
・普段楽しく聞いている洋楽を使って学べる文法・単語・表現の量に驚いた。
・洋楽を活用することの面白さや洋楽が教材としての役割を果たしている事を学んだ。今回の授業をきっかけに洋楽を用いて英語学習に取り組んでゆきたい。
・今まで洋楽に全く興味がなかったが、この授業で学んだことですごく興味がわいた。もっといろいろな洋楽を聞いてみたいと思うきっかけになった。
・いろいろな歌手の曲の中にそのような文法が使われているのかなど多くのことを知れて良かった。
・歌詞を通して、普段教科書では出てこない単語や表現が出てきて語彙力アップにつながった。
・洋楽を通し TOEIC に頻出の問題を解くことができとても勉強になった。
・自分の好きな洋楽で TOEIC の勉強ができることを知り、苦手に感じていた文法の勉強が楽しく感じ、これからももっと頑張ろうと学習意欲が向上した。
・日頃聞かない音楽を使っての授業だったため、新鮮な気持ちで授業にのぞめた。
・洋楽を通して仲間が増えた。自分の大好きな歌が何度も出てきて楽しく勉強できた。
・洋楽を聞いてリスニング力が向上した。
・大好きな洋楽とともに毎週英語の勉強ができて本当に楽しかった。より積極的に洋楽で英語を学んでいこうと意識が高まった。
・普通の堅苦しい TOEIC のリスニングより圧倒的に楽しかった。
・この授業を通して意識が変わり普段聞いている洋楽に積極的に耳を傾けるようになった。

以上の自由意見の抜粋からも、洋楽が学習者の情意フィルターを下げ、動機づけを高め、洋楽を聞こうとする意識や英語学習全般に対する学習意欲向上に有益であり、リスニング力・語彙力・文法力の向上に有益であると感じている学生が多いことが読み取れる。またこれまで興味がなかった何人かの学生に対しても洋楽に目を向けさせるきっかけを与えたことがわかる。

## 7．まとめ

本稿では、まず、洋楽を用いた英語教育の歴史・これまでの経緯に触れたあと、第二言語習得理論のうち代表的な動機づけ理論・情意フィルター仮説・目標設定理論などとの関連において洋楽を用いることの意義・位置づけについて論じた。その上で、先行研究を眺めた後、筆者が実践した「洋楽を用いて TOEIC スコア向上を目指す授業」の狙い・具体的内容を紹介し、その効果を授業の最後に実施したアンケート結果から分析し、先行研究と比較・検証した。

### 7．1　本稿で明らかなった点

洋楽を用いた英語授業・教育・指導の歴史は古く少なくとも1920年まではさかのぼり、洋楽の授業への導入はインターネット・パソコンなどの普及とともに急速に発展を遂げ、英語教育雑誌などでも定期的に取り上げる例が出てくるなど、大学・短期大学部などでも実践報告が相次いでいることを明らかにした。第二言語取得理論の枠組みの中では、洋楽利用は動機づけに非常に有効で、とりわけ、英語学習に対する心理的「壁」ともいうべき情意フィルターを下げる効果があり、TOEIC スコアアップという具体的で測定可能な、また学生がその達成に価値を置く目標と結び付けることによって、その相乗効果で、さらに動機づけを高め、TOEIC 対策としての英語学習・英語学習全般に有意義である可能性があることが分かった。とりわけ、リスニング力、発音の向上、語彙力・表現力の向上に有益であることが示唆された。筆者の授業実践のアンケートの分析結果は、先行研究のそれと多くの類似点があり示唆される有益性が同一であるとの結論に至った。また、その結果から、学習意欲を高め、中・長期的な TOEIC スコアの伸長に結び付けるという本授業の狙いは、概ね達成されたことが明らかになった。

### 7．2　今後の課題

今回報告した、洋楽を用いた授業実践は、対象学生が59名、アンケート有効回答数56名と少ないこと、元々洋楽が好きな学生が多く履修していること、2020年度秋学期・2021年度秋学期間の中のそれぞれ実質10回または11回の授業で期間・授業回数も十分とは言えないことなどの限界があり、本報告での分析結果を一般化することは到底できないことは十分に認識しなければならない。また、結果分析がアンケートのみに基づいており、期間が短期間であることから、一部の先行研究ではなされている TOEIC スコアの伸長度合という直接的な成果の検証がきわめて困難であり、それができていないことも大きな課題である。

しかしながら、以上の限界・課題を考慮に入れても、本稿の授業実践のアンケート結果分析から洋楽を利用して TOEIC スコアアップを目指す授業は、学生が学習意欲を高め、英語学習に対する親近感を増加させ、洋楽の歌詞の中から学ぶ TOEIC 頻出文法項目・TOEIC リスニ

ングにも役立つ音声変化・語彙・熟語などを楽しみながら身に付ける上で有益であることが明らかになった。上記の課題も踏まえ、今後は、さらに対象学生数を積み上げ、TOEIC スコアなどの客観的・長期的なデータ分析なども盛り込んで、洋楽を利用して TOEIC スコアアップを狙う授業の質を高めて行きたい。

## 参考文献


今村梨紗 「“Authentic Materials”として英語の歌を活用した大学での授業実践：情意フィルター仮説と学習動機の観点から」『同志社女子大学英語英文学会（Asphodel)』55号、pp.189-205, 2020年。Retrieved from https://ci.nii.ac.jp/naid/120006879307:（閲覧日2022年 1 月21日）

岩下いずみ 「高専における洋画・洋楽・ドラマを用いた授業実践報告」「映画英語教育研究紀要」21巻、pp. 45-58, 2016年。Retrieved from: https://ci.nii.ac.jp/naid/130007817517（閲覧日2022年 1 月21日）

植野由希恵 『「英語って楽しい」そう言ってもらえる授業を』『新英語研究』第629号、高文研、pp.18-19, 2022年。

江利川春雄 『近代日本の英語教育史―職業系諸学校による英語教育の大衆化過程』東信堂、2006年。

小樽商科大学 ホームページ Retrieved from: https://www.otaruuc.ac.jp/hkyomu1/kyomu_site/syllabus2022/01/01_110450_ja_JP.html（閲覧日2022年 4 月16日）

角山照彦 「英語教育における音楽教材の活用―音楽と異文化トピックを組み合わせた総合教材『ポップスで学ぶ総合英語』の開発―」『広島文教女子大学紀要』第36巻、pp.9-20, 2001年。Retrieved from: http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hirokoku-u/metadata/5549bunkyou-36.pdf.（閲覧日2022年 1 月21日）

小林敏彦 「洋楽を活用したリスニング活動」『小樽商科大学人文研究』105、p.81-121, 2003年。Retrieved from：https://barrel.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages...（閲覧日2022年 1 月21日）

佐藤洋一 『第二言語習得論に基づく、最も効率的な英語学習法』ディスカバー携書、2015年。

白井恭弘 『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店、2012年。

上智大学CLTプロジェクト『アルク選書シリーズ コミュニカティブな英語教育を考える』 アルク、2014年。

鈴木渉 『実践例で学ぶ第二言語習得研究に基づく英語指導』大修館書店、2017年。

滝口優＋筑摩書房英語教科書編集部編『高校生のためのポップス英文法 英語上達30曲』筑摩書房、1994年。

滝口優「英語教育による歌の意義と課題」『こども学研究所研究年報』No.25、白樺学園大学・白樺学園短期大学、pp.29-30, 2020年。Retrieved from : https://ci.nii.ac.jp/naid/120007000461（閲覧日2022年 1 月25日）

橋山芳子「英語の歌で授業を始めよう Hassyも歩けばEnglish Songsに当たる」『新英語研究』第629号、高文研、pp.24-25, 2022年。

平川冽 『「カムカムエヴリバディ」の平川唯一 戦後日本をラジオ英語で明るくした人』PHP研究所、2021年。

牧野眞貴 「英語リスニングにおける洋楽聞き取りの効果検証（英語に苦手意識を持つ大学生を対象として)」『リメディアル教育研究』第 7 巻第 2 号、p.265-275, 2012年。Retrieved from: https://www.

jstage.jst.go.jp/article/jade/7/2/7_KJ00008583631/_pdf/-char/ja（閲覧日2022年１月21日）

村野井仁 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店、2006年初版、2017年第９刷。

森貞 「洋楽を活用した授業が英語学習者に及ぼす効果について」『福井工業高等専門学校 研究紀要 人文・社会科学』第48号、福井工業高等専門学校、pp9-20. 2014年。
Retrieved from: https://karin21.flib.u-fukui.ac.jp/repo/kiyou.48_p9-20_cover._?key=ICUXAW kiyou.48_p9-20_cover._ (u-fukui.ac.jp)（閲覧日2022年１月21日）

森貞 「洋画・洋楽を用いた英語教育」『福井工業高等専門学校 研究紀要 人文・社会科学』第49号、福井工業高等専門学校、pp253-266. 2015年。Retrieved from: https://karin21.flib.u-fukui.ac.jp/repo/kiyou.49_p253-266_cover._?key=UZUGNF（閲覧日2022年１月25日）

文部省 昭和26年（1951）中学校・高等学校学習指導要領 外国語科英語編 I（試案）改訂版、1951、国立教育政策研究所教育研究情報データベースRetrieved from: CHAPTER 2 (nier.go.jp) https://erid.nier.go.jp/files/COFS/s26jhl1/jp-chap2.htm（閲覧日2022年１月25日）

文部省中学校・高等学校学習指導要領外国語科英語編（昭和31年改訂版）」国立教育政策研究所教育研究情報データベース、1956年。Retrieved from :https://erid.nier.go.jp/files/COFS/s31hl/chap3.htm（閲覧日2022年１月25日）

Dörnyei Z.（2005）.The Psychology of the Language Learner. Individual Differences in Second Language Acquisition. NY: Routledge.

_____. (2001/2012) Motivational Strategies in the Language Classroom. Cambridge: Cambridge University Press.

Kelly,M.(2005).Motivation, the Japanese freshman university student and foreign language acquisition. JALT Hokkaido journal, 9, 32-47

Lightbown, P.M., & Spada, N. (2006/2011). *How Languages are Learned*. Oxford: Oxford University Press.

Locke, E.A. and G.P. Lathanm.（2013, 2017）. Goal Setting Theory, 1990.In Locke, E.A. and G.P. Lathanm. (Eds.) New Developments in Goal Setting and Task Performance. NY: Routledge.

Roslim.N., Azizul.A.F., & Zain.M.M., (2011). Using Songs in Enhancing the Teaching of Grammar. *Advances in Language and Literary Studies. Vol.2. No.2,* 118-120. Retrieved from: https://journals.aiac.org.au/index.php/alls/article/view/15/12

Saricoban. A., &Metin.E.(2000). Songs, verse and games for teaching grammar. *The Internet TESL Journal 6,* 1-6. Retrieved from: http://iteslj.org/Techniques/Saricoban-Songs.html

Schoepp.K.(2001). Reasons for using songs in the ESL/EFL Classroom. *The Internet TESL Journal* Retreivedfrom: https://www.researchgate.net/publication/309390126_Reasons_for_Using_Songs_in_the_ESLEFL_Classroom

（くきもと・ひろふみ 短期大学部教授）